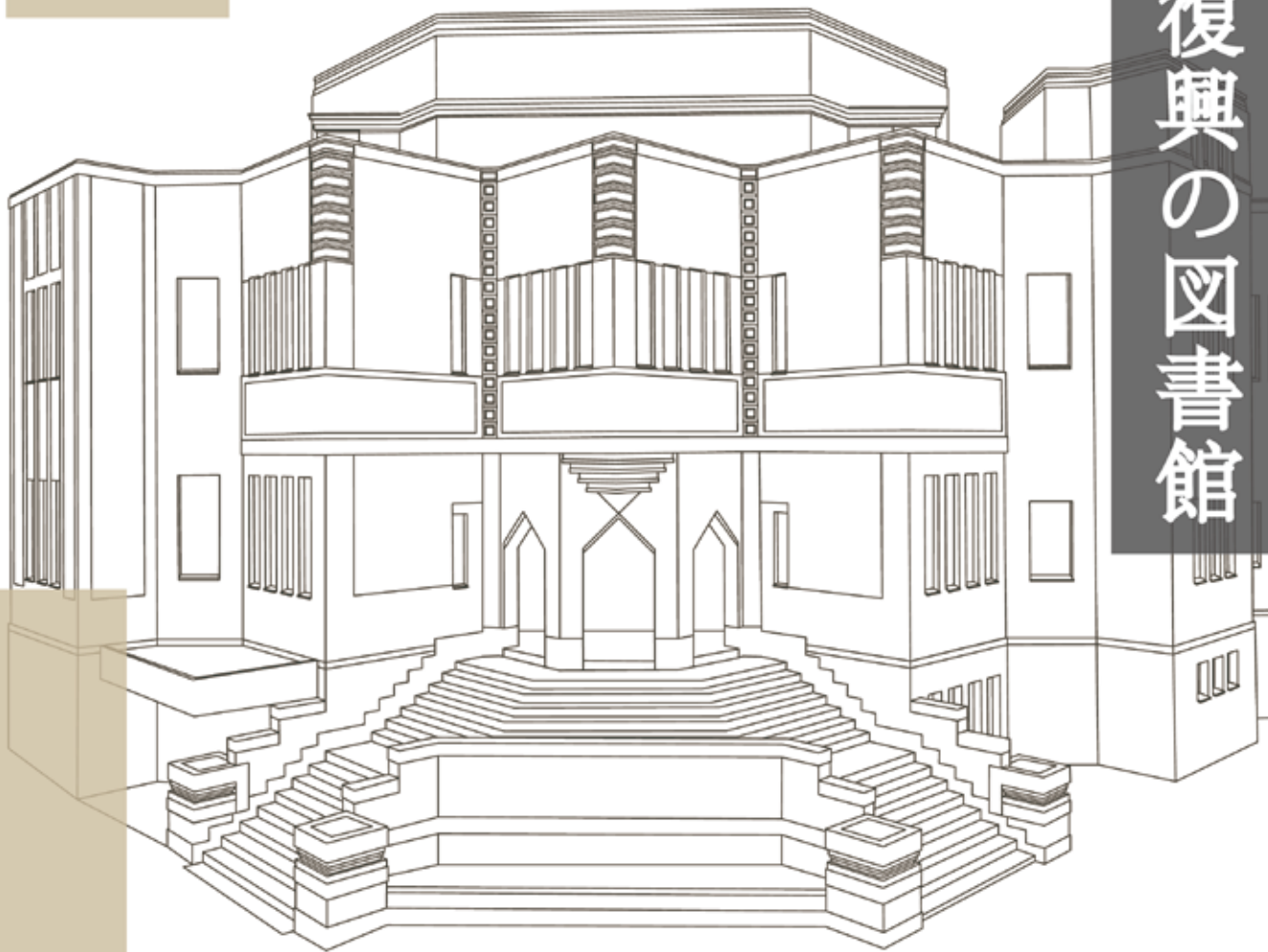


有形文化財（建造物）登録記念企画展
大正モダン
復興の図書館



駒澤大学旧図書館（禅文化歴史博物館・耕雲館）
設計者 菅原榮蔵 昭和3年開館

例言

1. 本書は有形文化財（建造物）登録記念企画展「大正モダン 復興の図書館」〈会期 令和 7（2025）年 5 月 12 日（月）—7 月 31 日（木）〉の展示図録です。
2. 本書の編集は、駒澤大学禅文化歴史博物館が行い、佐藤大樹（当館学芸員）が担当しました。
3. 本書における資料調査、撮影等は佐藤が行い、遠藤光賢（当館契約スタッフ、本学大学院仏教学研究科 仏教学専攻博士後期課程）が補助を行いました。
4. 本書掲載の資料写真については、その所蔵先を記しました。また、画像の提供を受けたものについては、画像提供先を記しました。所蔵先、画像提供先の表記がどちらもないものは当館所蔵の画像です。
5. 本書の作成、本企画展の調査、研究等については下記の機関、個人にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます（50 音順・敬称略）。

機関 INAX ライブミュージアム、株式会社サッポロビール、株式会社サッポロライオン、博物館 明治村、
T・S 建築史研究室

個人 内田祥士、小黒浩司、中山章

企画展開催によせて

みなさま、駒澤大学禅文化歴史博物館へ、ようこそ！

わが禅文化歴史博物館の「最大」の展示品は、博物館自身です。

現在、博物館として使用しているこの建物は、昔、駒澤大学の図書館でした。

関東大震災からの復興期——大正の終りから昭和の初め——大学の新図書館として建てられたこの建物は、モダンな意匠と当時最新の耐震技術が精巧に組み合わせられ、重厚な堅牢さのうちに音楽的な旋律とリズムを感じさせる独特の趣ある建築物となっています。そのため、この建物は、1999年に「東京都選定歴史的建造物」、さらに今年2025年には、ついに国の「登録有形文化財（建造物）」に登録されました。

それを記念して行う今回の展示は、設計者菅原榮蔵先生（1892—1967）の図案集はじめ、大正・昭和の建築に関する古い写真や資料、旧図書館ゆかりの品々などを多数集め、建築史的にも、教育史的にも、頗る興味ある内容となっています。みなさま、この機会に、ぜひ、わが禅文化歴史博物館に足をお運びいただき、天井のステンドグラスから降りそそぐ柔らかな光のなか、貴重な展示品の数々、そして、この建物そのものをゆっくりご覧になってみてください。建築物が実用と芸術の高度な統一体であること、そして、そうあるために、いにしえの建築家が、建物全体の構造から細部のタイル一枚一枚に至るまで、如何に心を配り智慧をしばったか、きっと、お感じいただけるものと思います。

駒澤大学禅文化歴史博物館長

小 川 隆

2025年5月吉日

第1章 建築家 菅原榮蔵とその代表作



菅原榮蔵（1892—1967）
（画像提供；T・S 建築史研究室）

菅原榮蔵は大正時代、昭和時代に活躍した建築家です。特にフランク・ロイド・ライトの帝国ホテル2代目本館（ライト館）の影響を受けた建築様式ライト風（式）建築の第一人者と評されます。

その代表作は、建築事務所からの独立後、最初の本格的な建設設計である旧新橋演舞場（大正14年竣工）、駒澤大学旧図書館（昭和3年開館）、大日本麦酒本社ビル（昭和9年竣工）が挙げられ、関東大震災からの復興時期を代表する建築家の一人です。

（菅原榮蔵の代表的建物）

- | | |
|-------|--------------------|
| 大正11年 | 高橋順太郎薬学博士の墓碑 |
| 大正14年 | 旧新橋演舞場（大正11年～） |
| 昭和3年 | 駒澤大学旧図書館（大正13年～） |
| 昭和6年 | 新橋保全会社（昭和4年～） |
| 昭和9年 | 大日本麦酒本社ビル（昭和6年～） |
| 昭和11年 | 吉田時計会社日野工場（昭和10年～） |
| 昭和13年 | 吉田時計会社本社記念室 |
| 昭和25年 | 茨城県山口楼料亭 |
| 昭和30年 | 宮城県中村医院 |

「自筆略歴書（1956年作成）」（菅原定三『美術建築師・菅原榮蔵』から一部抜粋・加筆



菅原榮蔵図案集（当館蔵）

建築図案に1919—1921年の年代と「栄」と見られる記号が付されています。当該図案には「E. Sugawara」のサインがあります。年代としては曾禰中條事務所所属時期から、建築興業会社を経て独立する時期に当たります。

菅原榮蔵の代表作①

駒澤大学旧図書館

(禅文化歴史博物館・耕雲館)

菅原榮蔵 / 森田組 / 昭和 3 (1928) 年 / 鉄骨鉄筋コンクリート造
/ 地上 2 階、地下 1 階 / スクラッチタイル貼り、テラコッタ
使用

駒澤大学旧図書館は、昭和 3 (1928) 年に開館した駒澤大学の 2 代目図書館です。当初は、図書庫と閲覧室からなりましたが、昭和 48 (1973) 年に 3 代目図書館が完成すると図書館としての機能を移行し図書庫は取り壊され、現在は元の閲覧室部分のみが残されています。

設計者は、ライト風 (式) 建築の第一人者と評される菅原榮蔵です。鉄骨鉄筋コンクリート造の耐震性を備えた建物にスクラッチタイルと幾何学模様のテラコッタによる装飾はフランク・ロイド・ライトの帝国ホテル 2 代目本館 (ライト館) を想起させます。一方で、折板構造と呼ばれる屏風上に造られた外観やトップライトにステンドグラスを配した吹き抜けの閲覧室の空間構造などは菅原榮蔵の独創性を感じさせる建物です。

また、旧図書館は関東大震災後の復興期に建てられた図書館として現存する、東京都内でも稀少な事例です。1999 年に東京都選定歴史的建造物、2025 年に国登録有形文化財への登録が決定しています。



上 駒澤大学旧図書館外観 正面 (東側) 左下 同北側玄関 右下 同南東側



駒澤大学旧図書館内観 北側玄関（現禅文化歴史博物館入口）



駒澤大学旧図書館内観 北側1階エントランス（現禅文化歴史博物館受付）



駒澤大学旧図書館内観 階段1階から



駒澤大学旧図書館内観 1階階段脇スペース



駒澤大学旧図書館内観 階段2階から



駒澤大学旧図書館内観 旧閲覧室（現禅文化歴史博物館1階常設展示室）



駒澤大学旧図書館内観 ステンドグラス



駒澤大学旧図書館内観 1 階菅原榮蔵設計の椅子と間宮商店製の棚



駒澤大学旧図書館内観 2 階菅原榮蔵設計の椅子と衝立

菅原榮蔵の代表作② 旧新橋演舞場

菅原榮蔵 / 大正 14 年 / 鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造。壁体は煉瓦一枚半積み / 地上 3 階、地下 1 階

菅原榮蔵が独立後に手掛けた最初の建築設計にして代表作の 1 つとされる建物です。旧新橋演舞場は現存していませんが、建築後間もない大正 15 年、建築家伊東忠太の勧めにより榮蔵自らが編集した写真集『新橋演舞場』が刊行されています。

写真集冒頭には工事概要があり、外観は、蛇腹部分に幾何学模様の愛知県常滑産テラコッタを使用し、壁面は黄褐色の化粧煉瓦で装飾されていました。正面立上りの彫刻と楽屋胸壁は人造石洗い出し、正面入り口廻りには常陸産花崗岩、腰回りは相州産堅石張と記されています。内観は、正面玄関壁面はドイツ「ヴィレロイボッホ」社製のモザイクタイルとガラスモザイク張、各部屋はセメントプラスター下地に石膏彫刻をつけ着色されていたと記されています。

写真集序文で、榮蔵は一つ困ったこととして、建築様式についてフランク・ロイド・ライトの模倣のように言われることを挙げています。旧新橋演舞場の外観・内観の意匠から家具に至るまでライトの影響を想起させますが、榮蔵はあくまでも時代や環境等を受けて設計者自身の内側から湧き出したデザインであると記しています。



画像はすべて菅原榮蔵『新橋演舞場』
(本学図書館蔵) より

旧新橋演舞場外観 正面



旧新橋演舞場外観 東側非常口付近

画像はすべて菅原榮蔵『新橋演舞場』（本学図書館蔵）より



旧新橋演舞場外観 正面玄関内部



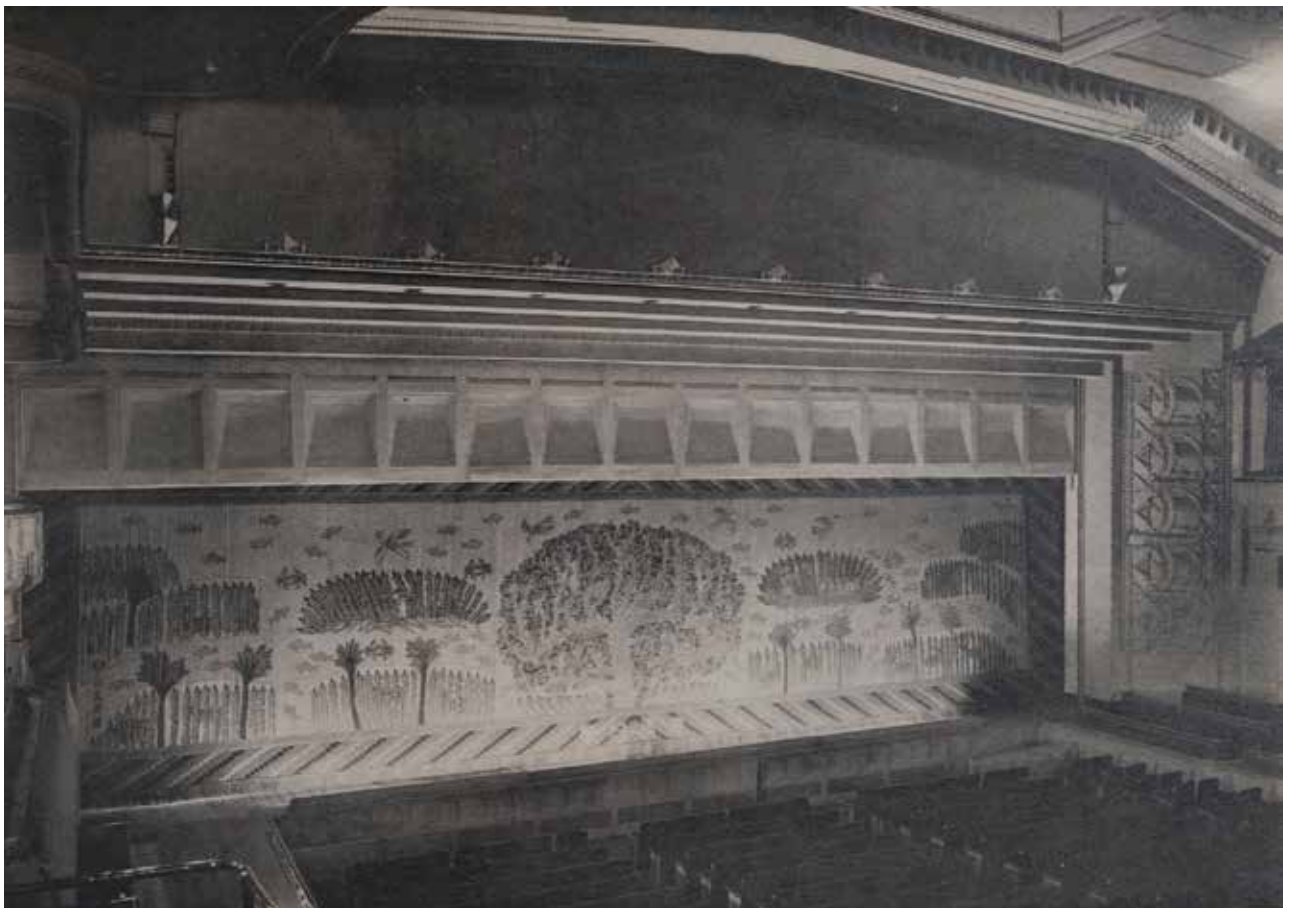
旧新橋演舞場外観 西側非常口付近



旧新橋演舞場外観 正面部分拡大



旧新橋演舞場内観 観覧席、大天井



旧新橋演舞場内観 舞台側観覧席

画像はすべて菅原榮蔵『新橋演舞場』（本学図書館蔵）より



旧新橋演舞場内観 喫煙室



旧新橋演舞場内観 東側控室



旧新橋演舞場内観 西側控室

菅原榮蔵の代表作③

大日本麦酒株式会社本社ビル (現銀座ライオンビル)

菅原榮蔵 / 竹中組 / 昭和 9 (1934) 年 / 鉄筋コンクリート造、ビアホール内トラバーチン、色タイル、ガラスモザイク / 地上 6 階地下 1 階建、塔屋付 1 棟 / 現在、東京都中央区銀座七丁目 1 番

大日本麦酒株式会社の本社ビルとして竣工。1 階ビアホールの色タイルはトラバーチンを初めてドイツから輸入し、壁面のモザイク画は榮蔵自らが作画し大塚喜蔵が製作した、初めて日本人が全行程を作り上げたガラスモザイクです。

2 階から 5 階は事務スペースでしたが、昭和 14 (1939) 年に 2 階を改修しレストランが作られています。また、建設終盤になり、当初計画になかった 6 階が増設され、会議室が加えられました。2022 年に銀座ライオンビルとして登録有形文化財（建造物）となり、1 階は現存する日本最古のビアホールとして今日でも使用されています。

大日本麦酒株式会社の創業者・馬越恭平は榮蔵が手掛けた新橋保全会社（昭和 6 年竣工）の地下にあった「マユラ」というレストランがお気に入り、その縁から本社ビルの設計を依頼したとされます。



大日本麦酒株式会社本社ビル外観 正面
画像提供；株式会社サッポロライオン



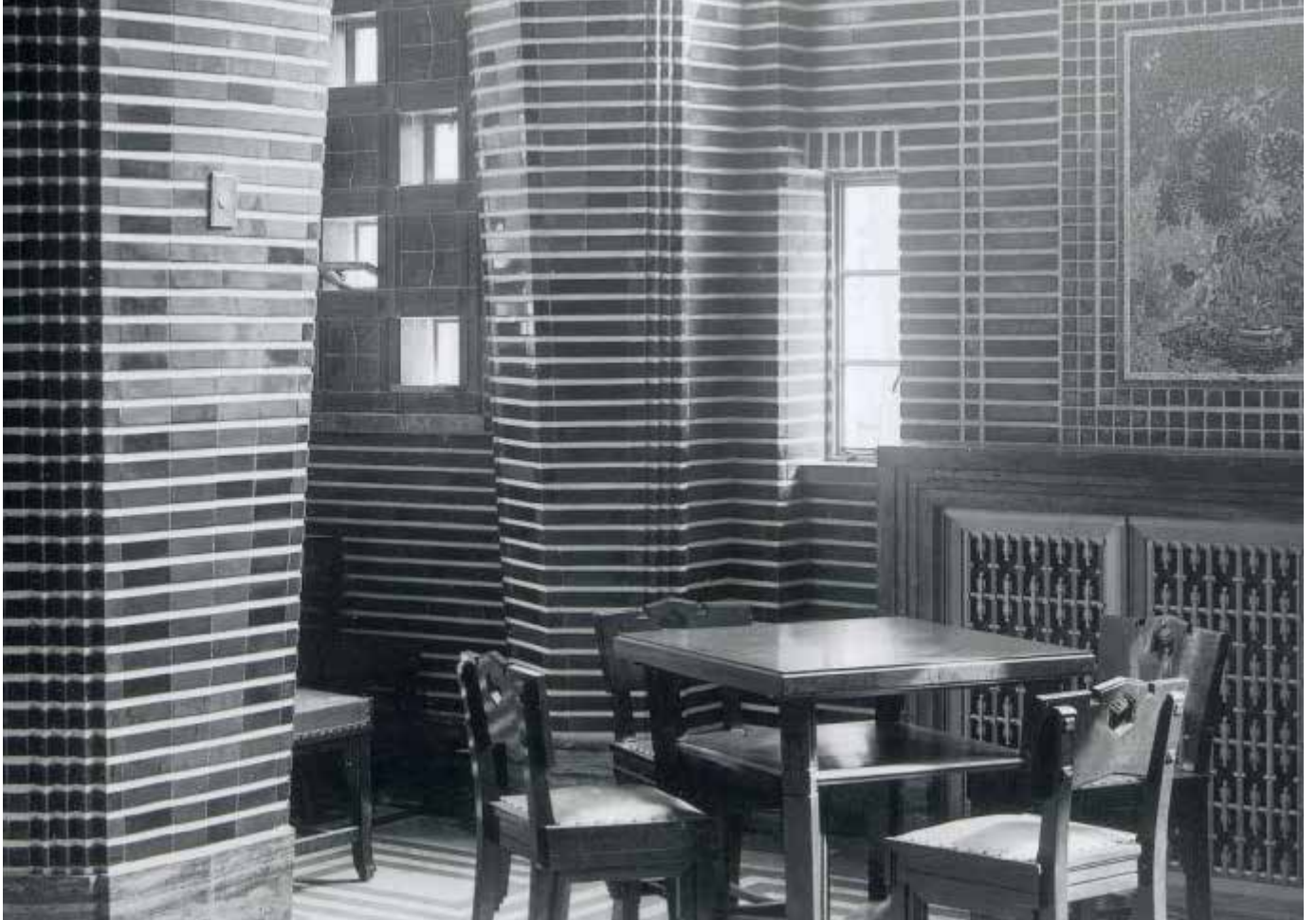
大日本麦酒株式会社本社ビル外観 東正面
画像提供；株式会社サッポロライオン



大日本麦酒株式会社本社ビル内観 1階ビアホール（竣工当時）



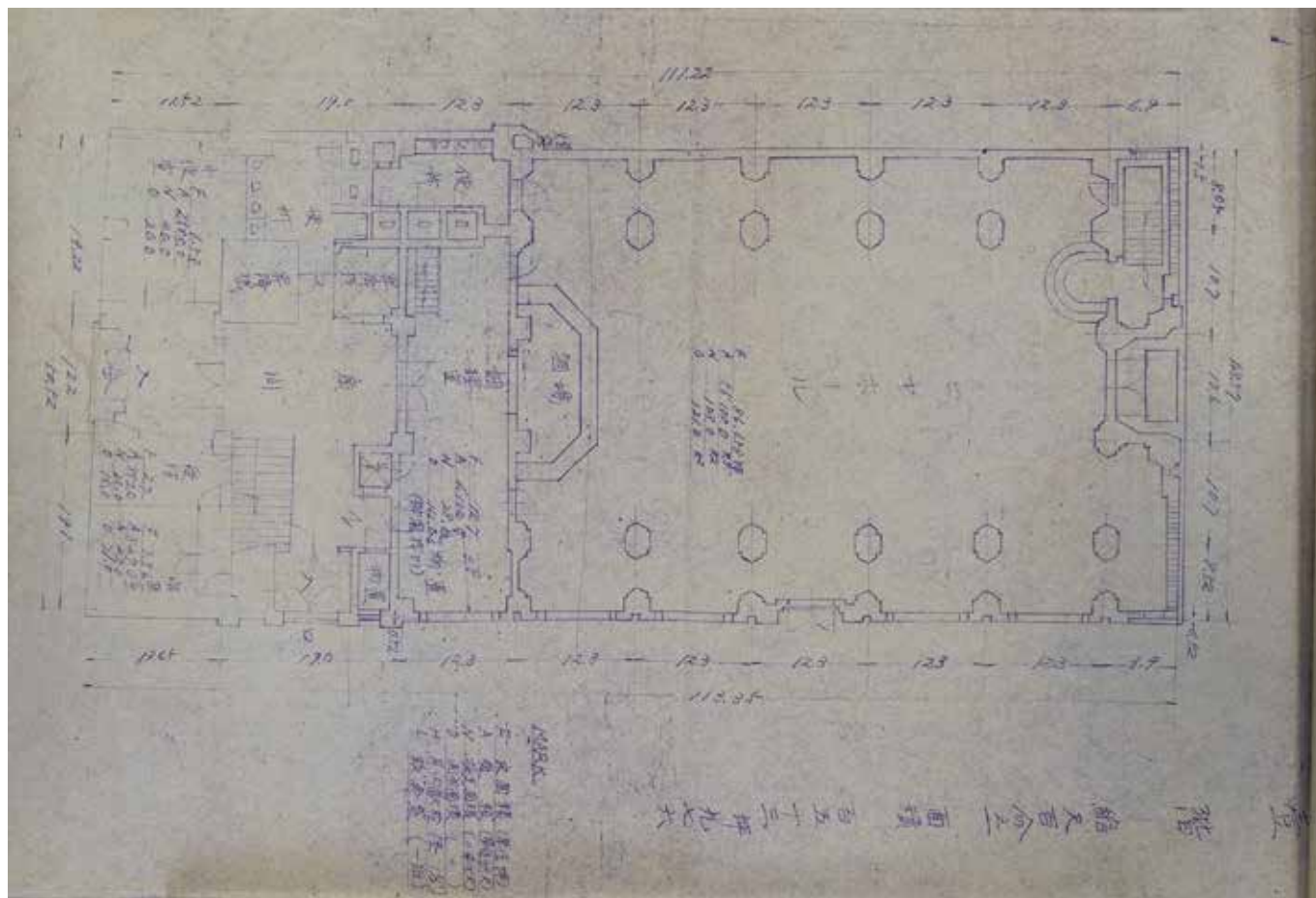
銀座ライオンビル内観 1階ビアホール（現在）



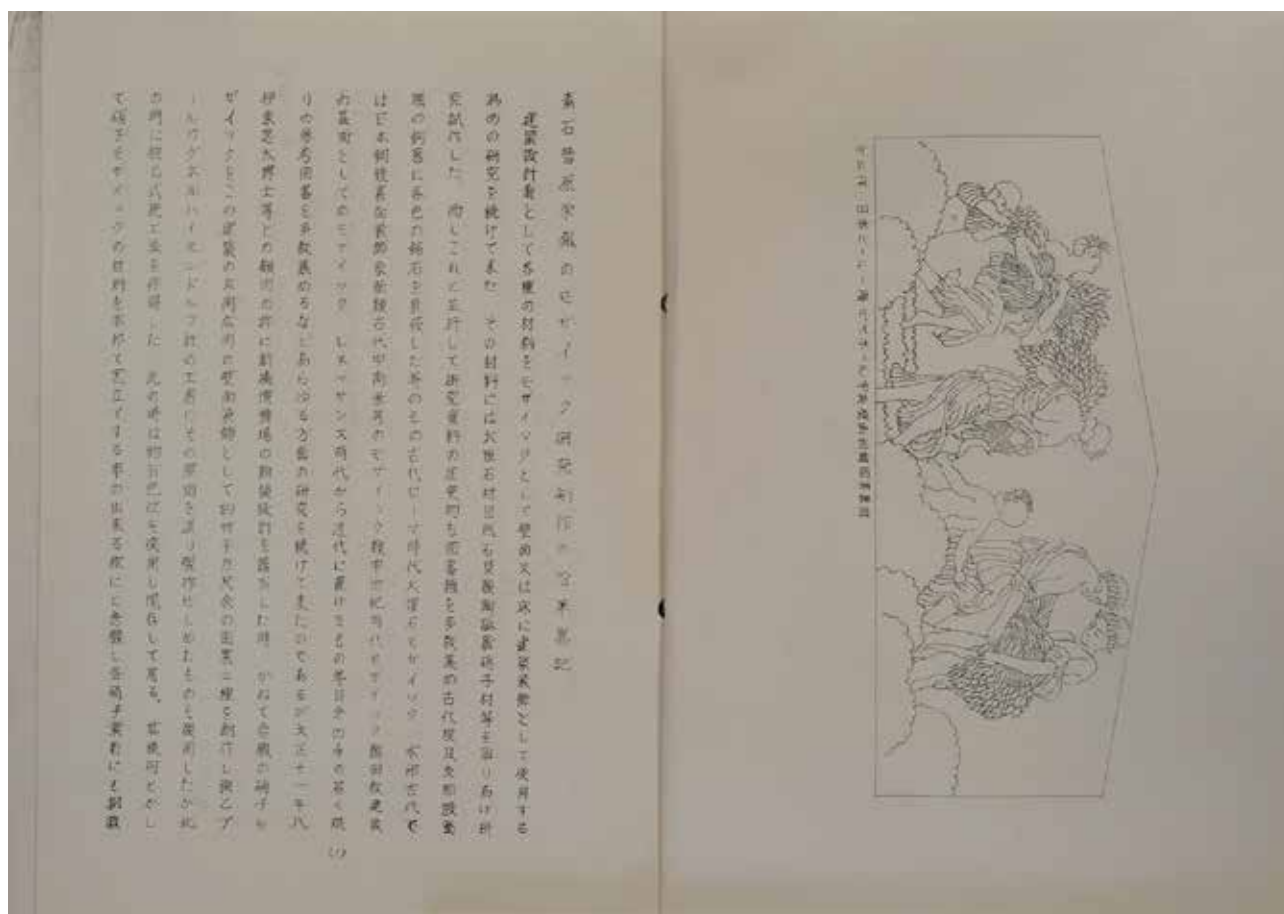
大日本麦酒株式会社本社ビル内観 1階（竣工当時）



大日本麦酒株式会社本社ビル内観 1階ビアホール（1945年頃）



大日本麦酒株式会社本社ビル建築図面



大日本麦酒株式会社本社ビル モザイク画制作に関する座談会

昭和 30 年代に菅原榮蔵、大塚喜蔵（大塚硝子）らモザイク画制作に関わった人々を集めた座談会の記録

第2章 フランク・ロイド・ライトとライト風建築

大正12（1923）年に発生した関東大震災は、関東地方を中心に大きな被害を与えました。特に当時の東京市と横浜市における揺れとその後の火災による被害は大きく、東京市では全戸数の6割以上が全焼したとされます。

この震災当日に落成式を行い、奇跡的に倒壊と火災を免れたのがフランク・ロイド・ライト（1867—1959）設計の帝国ホテル2代目本館（ライト館）でした。震災後の復興事業の中で、ライト館に影響を受けた建物が多く建てられ、ライト風（式）建築と呼ばれます。

関東大震災と近代建築

関東大震災による大規模な被害は、明治維新以降、西洋の建築技術を吸収し発展を遂げてきた近代建築の在り方に対して、反省と変革をもたらしました。木造、煉瓦造、石造の建築様式は、耐震・耐火構造を意識した鉄筋コンクリート造へと変わりました。



丸の内シナ惨状

（大東京シナ火災の實況）

関東大震災による被害（丸の内） 大東京シナ火災の實況（個人蔵）



上野帝室博物館の焼失跡

（大東京シナ火災の實況）

関東大震災絵葉書（上野帝室博物館） 大東京シナ火災の實況（個人蔵）

復興建築の指針となった

フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル

フランク・ロイド・ライト / 大倉組 / 大正 6 (1917) 年 / 鉄骨コンクリート造、一部煉瓦造 / 地上 3 階、地下 1 階 / 外部: 大谷石・スクラッチ煉瓦併用、内部: 檜椽甲板張、テラコッタ・クリンカータイル仕上、その他石膏ボード等

帝国ホテル 2 代目本館（ライト館）は震災当日に落成式を開催していたものの、奇跡的に倒壊と火災を免れました。ライト館では鉄骨コンクリート造の表面を大谷石やテラコッタ製の幾何学模様の装飾が彩りました。地震と火災への耐性を持つとされ、それまでの西洋建築の枠に収まらない装飾性に富んだライト館は、震災復興期の建物に大きな影響を与えました。



帝国ホテルライト館外観 東京帝国ホテル絵葉書（個人蔵）



帝国ホテルライト館外観 東京帝国ホテル絵葉書（個人蔵）



帝国ホテルライト館内観
東京帝国ホテル絵葉書（個人蔵）



帝国ホテルライト館内観
東京帝国ホテル絵葉書（個人蔵）



フランク・ロイド・ライトに関する著作
（個人蔵）

復原移築されたライト館 博物館 明治村

帝国ホテル 2 代目本館（ライト館）は老朽化のため、昭和 42（1967）年に取り壊しが決められました。地盤沈下など老朽化が激しく、維持管理が限界を迎えたことによる新館への建て替えの決定でした。しかし、日本の建築家を中心に広まったライト館の保存運動は、最終的には日米政府も関係する大規模なものとなりました。

昭和 43 年に解体されたライト館は、様式保存（表面上の見た目を完全に再現する）を前提とし、愛知県犬山市の博物館明治村に中央玄関が復原移築されました。明治村による復原移築は 18 年もの歳月をかけ昭和 60 年に完成し、現在は一般公開されています。



博物館 明治村 ライト館外観
画像提供；博物館 明治村



博物館 明治村 ライト館内観 中央玄関
画像提供；博物館 明治村

ライト館を彩った建築陶器 帝国ホテル煉瓦製作所

帝国ホテル2代目本館（ライト館）の装飾には大谷石の彫刻のほか、400万点以上の焼き物が使用されました。これらの焼き物の多くは愛知県常滑市に設立された帝国ホテル煉瓦製作所で造られました。煉瓦の焼き上がりは赤色ではなく黄色としたライトの要望に応え、愛知県の知多半島の土を使い試行錯誤の末に完成したとされます。煉瓦製作所はライト館完成後に役目を終えますが、その後工人頭であった伊奈初之丞・長太郎親子に買い取られ伊奈製陶となり、現在のINAXへと繋がっています。



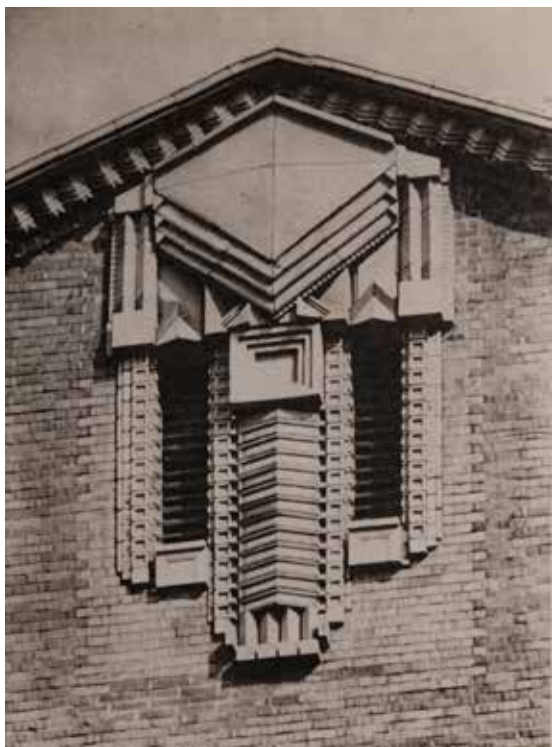
帝国ホテル煉瓦製作所内でスダレ煉瓦を製作する職人たち
画像提供；INAX ライブミュージアム



帝国ホテル二代目本館に施工されたスダレ煉瓦 製作：帝国ホテル煉瓦製作所
大正6―10（1917―1921）年 画像提供；INAX ライブミュージアム 撮影：梶原敏英

ライトの意匠、菅原榮蔵の意匠 ー スクラッチタイル、テラコッタ、 クリンカータイル ー

スダレ煉瓦とスクラッチタイル



旧新橋演舞場の化粧煉瓦
画像提供；本学図書館蔵『新橋演舞場』より



復原されたライト館のスクラッチタイル
画像提供；博物館 明治村

ライト風建築の特徴の一つに、柱や壁面に設置される幾何学模様の建築陶器があります。菅原榮蔵設計の建物にも、多くの建築陶器が使用されています。

ライト館の建築陶器と菅原榮蔵の建築陶器を比較して紹介します。

帝国ホテル2代目本館（ライト館）の外観、内観には多くのスダレ煉瓦が使用されました。ライトは建設を受注する折に、黄色の煉瓦を生産することとその煉瓦を大量に生産することを条件としたとされます。その要望に応じて愛知県常滑市に設立されたのが、帝国ホテル煉瓦製作所でした。

菅原榮蔵は当館建設時にも、ライトのスダレ煉瓦の意匠を引き継いだスクラッチタイルを多用しています。スクラッチタイルはライト風建築のみならず、その後の多くの建物に使用されています。



大日本麦酒本店ビルのドイツ製トラバーチン、
色タイル 画像提供；株式会社サッポロライオン



駒澤大学旧図書館の現在のスクラッチタイル

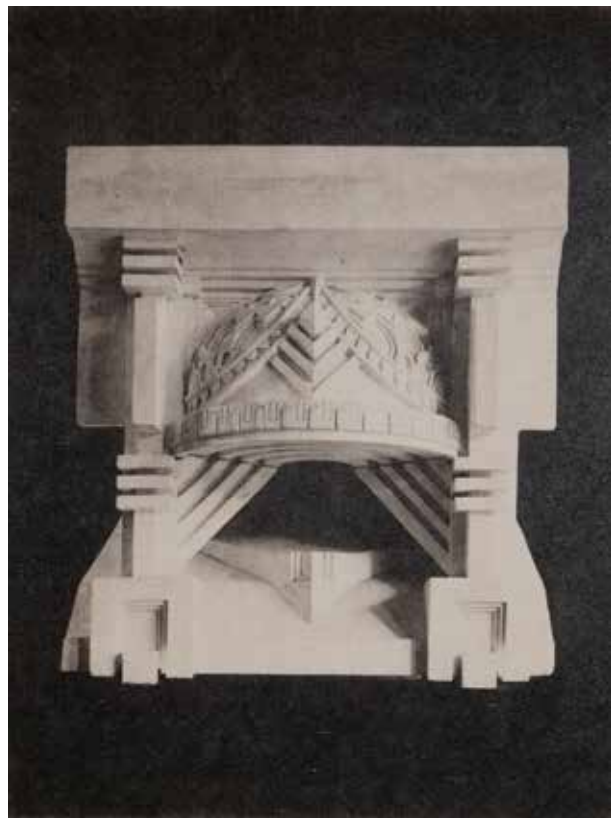
テラコッタ



帝国ホテル二代目本館で使われていた、コーナー用のテラコッタ
製作：帝国ホテル煉瓦製作所 大正 6—10（1917—1921）年
画像提供；INAX ライブミュージアム 撮影：梶原敏英

主に金具等で梁や壁、柱などに固定する大型のタイルで、一般的には施釉されているものを言います。

ライト館の柱や壁面は幾何学模様の大谷石の彫刻やテラコッタ製の装飾が設置されました。菅原榮蔵の建物でもテラコッタや石膏ボードなどで作られた装飾が多用されます。当館では北側玄関上には茶色のテラコッタ装飾、旧閲覧室には吹き抜けスペースを六重に囲む白色のテラコッタ装飾が使用されています。



旧新橋演舞場のテラコッタ
画像提供；本学図書館蔵『新橋演舞場』より



駒澤大学旧図書館北側玄関上のテラコッタ装飾

クリンカータイル



駒澤大学旧図書館北側玄関床面のクリンカータイル

駒澤大学旧図書館北側玄関床面のクリンカータイル拡大

主に湿式で作られる厚みのある床タイルです。滑り止めのため表面に浮き出し型の文様が施されます。

ライト館では多くのクリンカータイルが使用されましたが、テラコッタ装飾等とは異なり、帝国ホテル煉瓦製作所にその図案が残されておらず、製作工房の特定はできません。

当館の現在の入り口（旧図書館の北側玄関）床面には、開館当時のクリンカータイルが現存しています。建設時の記録が残されていないため製作地等の詳細は分かりませんが、クリンカータイルの意匠はライト館と同様と推察されます。



帝国ホテル二代目本館で使用されたクリンカータイル 大正時代中期

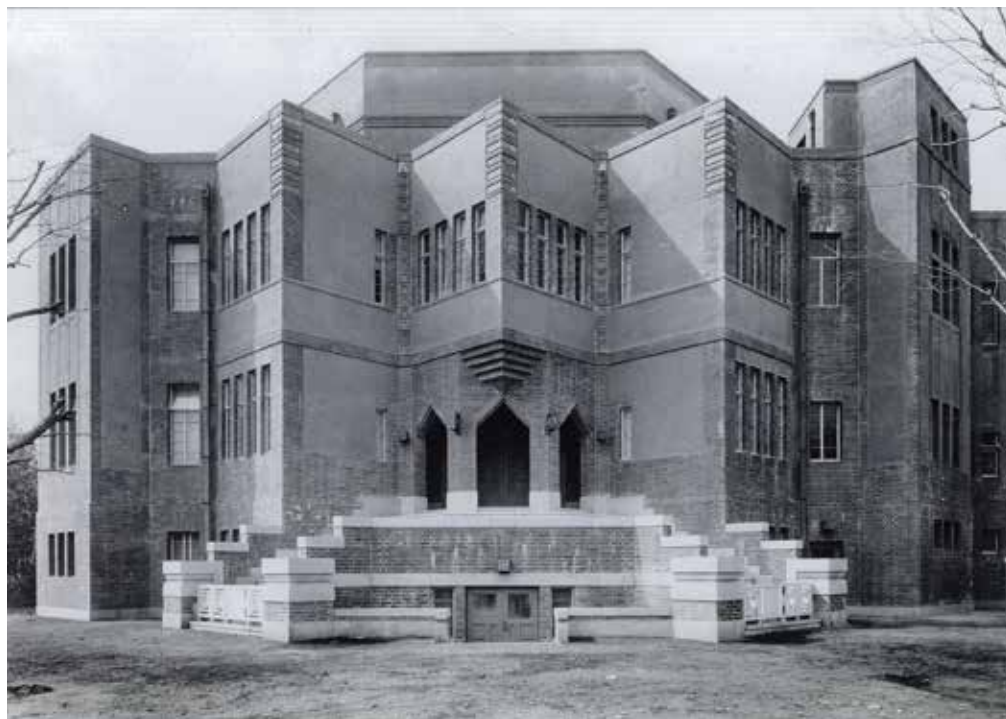
画像提供；INAX ライブミュージアム 撮影：梶原敏英

常滑市でつくられた床用のタイル。ただし、ライトの設計図面と煉瓦製作所の製造記録に同タイルの記述は確認できません。

第3章 駒澤大学旧図書館の建設と菅原榮蔵

菅原榮蔵は、大正14（1925）年に旧新橋演舞場を完成させ、建築家として注目を集める存在となりました。これに前後して、榮蔵は駒澤大学旧図書館（2代目図書館）の設計を依頼されると、本学正門近くに転居し、生涯そこで暮らすことになりました。

駒澤大学の図書館は、大正12（1923）年に発生した関東大震災により煉瓦造りの初代図書館が損壊し、大正13年から14年に新書庫を建設、大正15年には新閲覧室の建設を開始、昭和3（1928）年に2代目図書館として開館しました。書庫スペースは昭和48（1973）年の3代目図書館建設後に取り壊され、現存する建物は閲覧スペースのみです。



上；開館当時の駒澤大学旧図書館 画像提供；T・S 建築史研究室

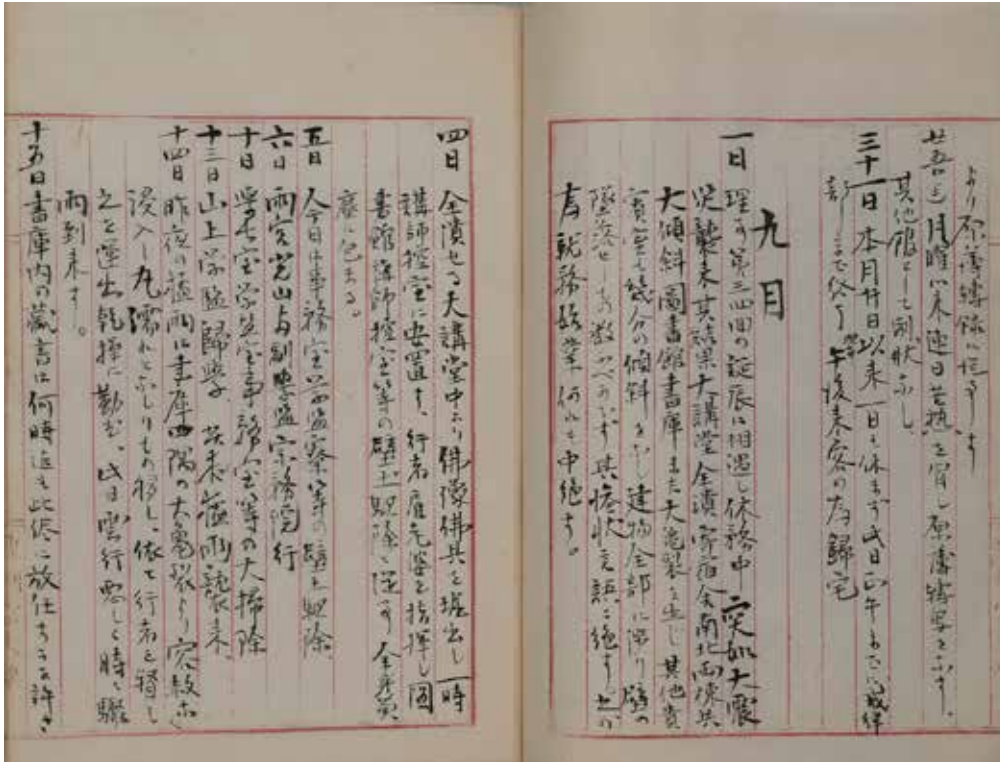
中左；同図書館側（西側）から 画像提供；T・S 建築史研究室

中右；同閲覧室 画像提供；T・S 建築史研究室

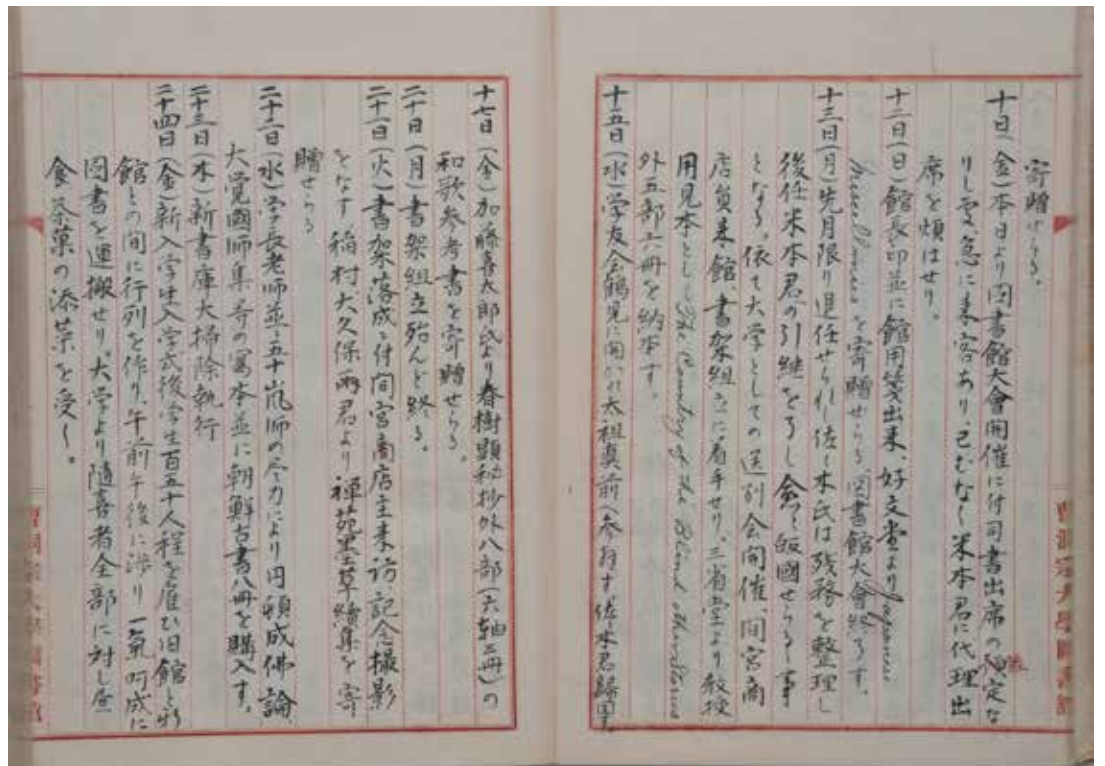
下；昭和4（1929）年閲覧室で行われた卒業式
壇上は忽滑谷快天学長

初代図書館の被災と新図書館の建設

駒澤大学には、明治 45（1912）年から昭和 5（1930）年まで、歴代の図書館員達によって書き継がれた業務日誌『図書館誌』が残されています。その記述によると、図書館は関東大震災による亀裂から、その後浸水し、蔵書と書架、印刷用の版木などを閲覧室に避難させ臨時書庫としたことが分かります。10 月 11 日には「高田儀光館長ら新図書館の建築のため曹洞宗務院に行く」とあり、震災の翌月には新図書館建設のための交渉を開始しています。

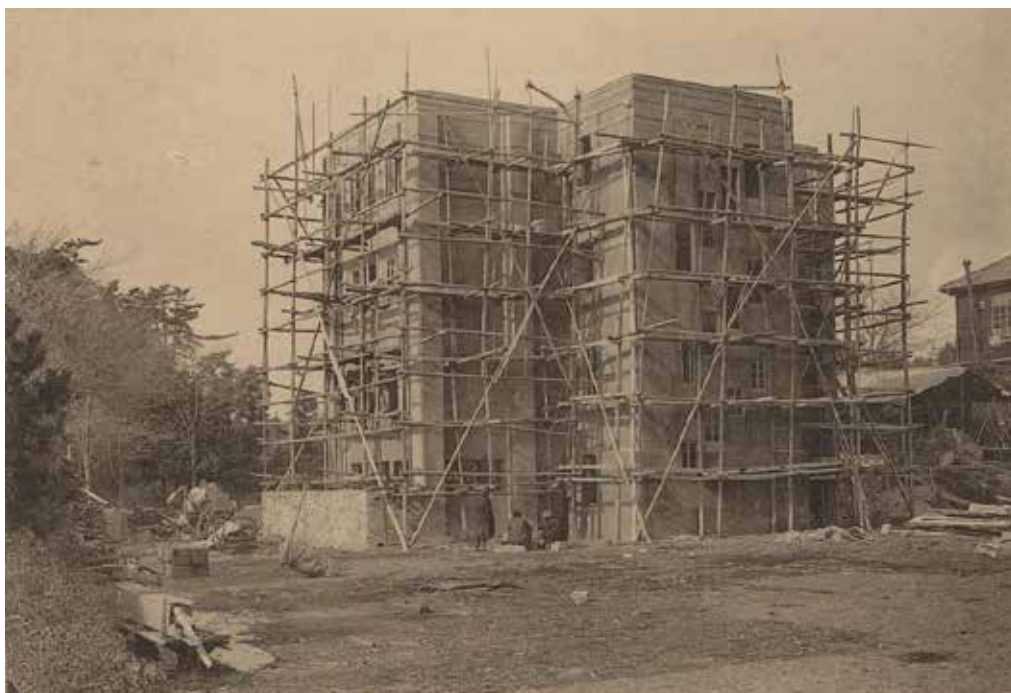


『図書館誌』1号 大正 12 年 9 月 当館蔵



『図書館誌』2号 大正 14 年 4 月 当館蔵

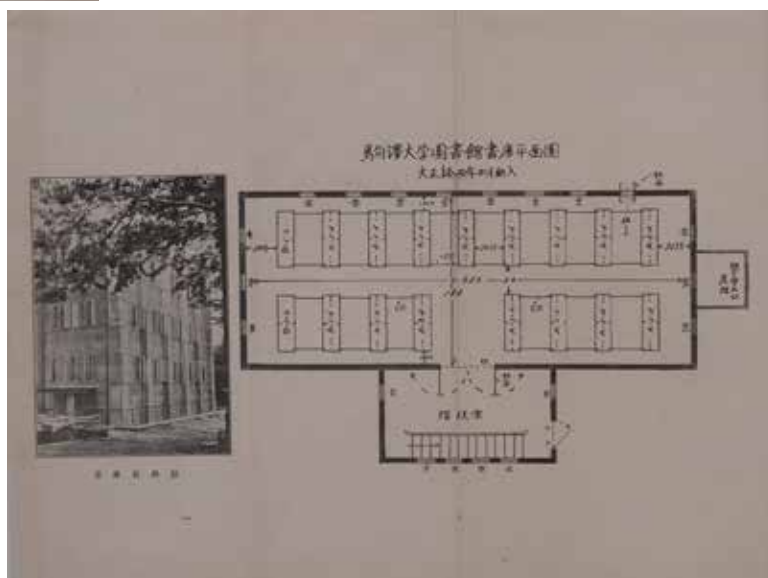
大正 14 年 4 月 21 日には間宮商店の FM 式書架が入り、23 日に書庫大掃除、24 日は学生 150 人を雇っての蔵書の運び込みが記録されています。



建設中の図書館 画像提供；T・S 建築史研究室



図書館落成の記事 『図書館研究』5号（個人蔵）より



図書館平面図 『図書館研究』5号（個人蔵）より

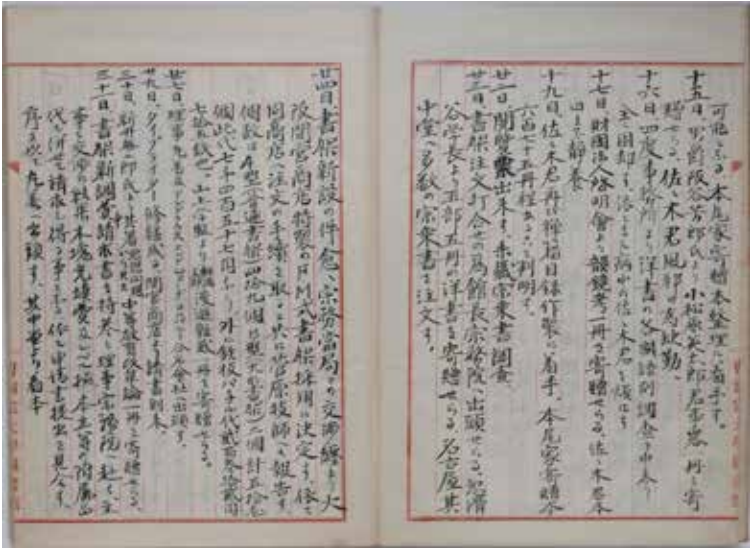
震災復興期の図書館用品



間宮商店の図書館用品
『図書館雑誌』昭和3年3月号（本学図書館蔵）より

図書館、閲覧室の設計・建設と並行して、図書係であった小川靈道らは近隣の図書館を巡り、その建築や用品類について見識を深めていきました。当時の図書館業界では、震災時の反省から耐震・耐火性が強く意識され金属製の用品類を採用する風潮がありました。

本学の図書館用品は、小川をはじめとする図書館員の希望により、震災後に主流となりつつあった耐震・耐火性を意識した用品が導入されています。選定の過程では、日本初の図書館用品の総合商社と称される間宮商店の創業者・間宮不二雄も来館し、図書館員や菅原榮蔵と話し合う記録も残ります。



間宮商店製 FM 式書架の導入に関する記事
当館蔵『図書館誌』2号より



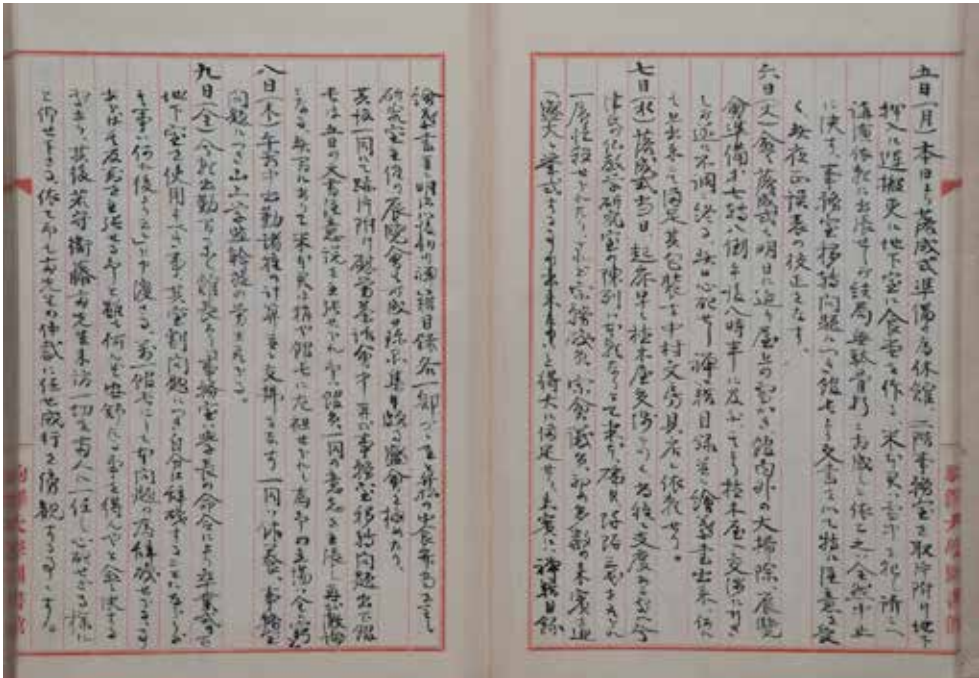
FM 式大型浮出蔵書印 当館蔵



アンダーウッド社製タイプライター 当館蔵

駒澤大学旧図書館の開館

駒澤大学旧図書館は、大正 14（1925）年 4 月に図書館が完成し、同年 9 月には閲覧室の設計を館長、館員、菅原技師で協議、翌年 4 月には施工業者を森田組に決定しています。昭和 2（1927）年 11 月 15 日には一般学生の利用が開始されますが、開館式典は昭和 3 年 3 月 7 日まで延期されます。その要因としては、式典で配る予定であった禅籍目録の完成の遅れや出版費用の予算執行の問題などがあったとされます。



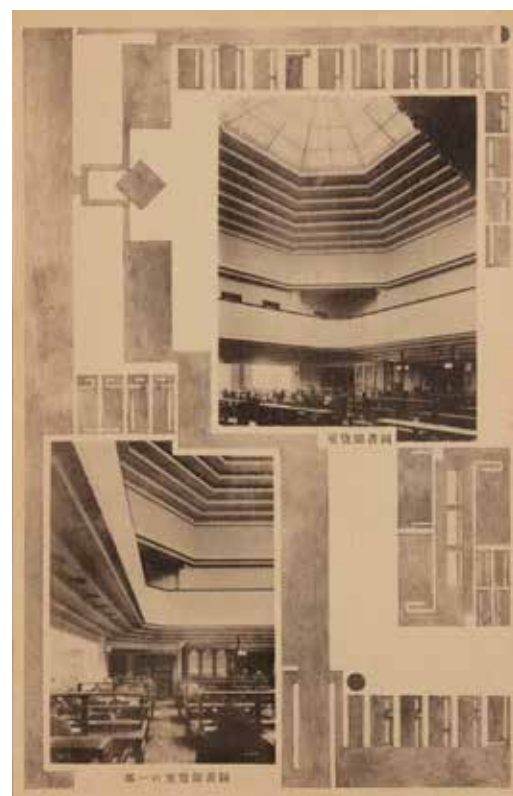
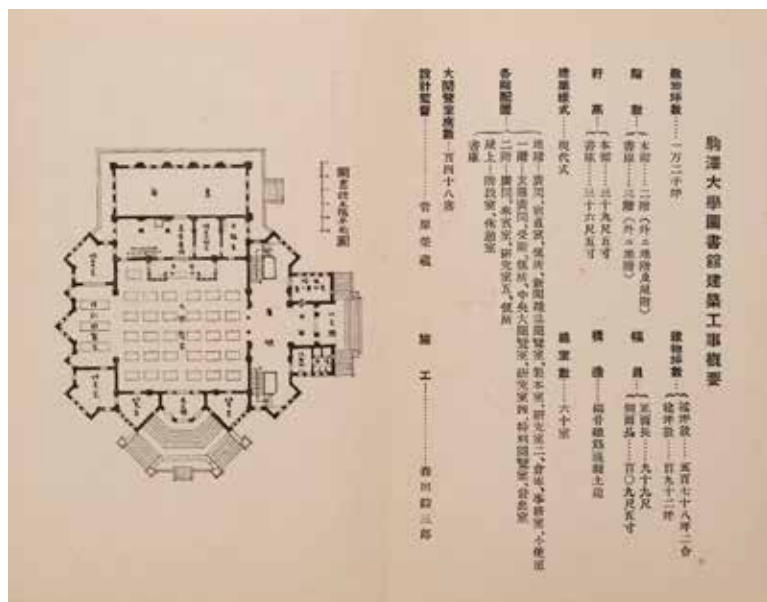
『図書館誌』3 号 昭和 3 年 3 月 7 日 当館蔵

新図書館落成式の記録があります。当日は、曹洞宗関係者をはじめ多数の来賓が訪れ、来賓には禅籍目録、絵葉書、明治以後に刊行された禅籍の目録、弁当が配られたと記されています。



駒澤大学旧図書館の開館を紹介する雑誌記事
『図書館雑誌』昭和 3 年 6 月号（本学図書館蔵）より

新築駒澤大學圖書館繪葉書



落成式で配られた菅原榮藏デザインの絵葉書セット 当館蔵

第4章 菅原榮蔵と駒澤大学旧図書館を結ぶ人々

菅原榮蔵は、駒澤大学旧図書館の設計を請け負った後、当時の本学正門前に転居し、旧図書館と旧2号館を手掛けました。
菅原榮蔵と駒澤大学を直接結び付けた人物は、はっきりと分かっていませんが、直前の旧新橋演舞場の設計に榮蔵を抜擢し、同時期に計画が進んでいた武蔵野女子大学建設計画（昭和2年）でも連名でのキャンパス設計図が残る伊東忠太を第一候補とすることができます。榮蔵自作の履歴書では駒澤大学旧図書館について「伊東博士の賞賛を受く」と記されています。



伊東忠太（1867—1954）

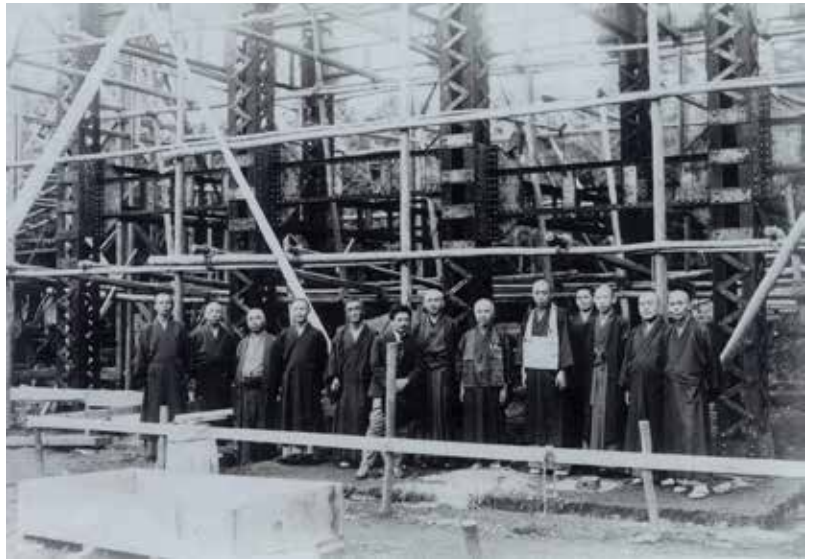
画像提供；国会図書館近代日本人の肖像より

日本最初の建築史家 伊東忠太

伊東忠太は明治、大正、昭和時代の建築家にして日本で最初の建築史家です。東京帝国大学造家学科の辰野金吾に学び、大学院進学後の博士論文として発表されたのが法隆寺再建非再建論です。西洋の建築技術を積極的に受容した辰野や曾禰達蔵らの第一世代に対し、未来の日本建築を創出するためには日本や東洋の建築史研究が不可欠と伊東は考えました。

伊東の代表作には宗教関係の作品が多くあります。平安神宮（京都府）、築地本願寺（東京都）などの浄土真宗に関わる建物、可睡斎護国塔（静岡県）や總持寺僧堂（神奈川県）などの曹洞宗に関わる建物を多く手掛けています。

菅原榮蔵と本学関係者たち



建設中の図書館前での集合写真 大正13年

画像提供；T・S建築史研究室

中央の有髪の人物が菅原榮蔵。右から3番目が忽滑谷快天、左から3番目が山上曹源。



旧図書館建設時の学長
忽滑谷快天（1867—1934）

旧図書館建設時の学監 山上曹源（1878—1957）

榮蔵の転居先に自身の家の隣、当時の大学正門外（現在の本学キャンパス内駐車場付近）を紹介。山上家と菅原家の付き合いは生涯続いたとされます。



菅原榮蔵と駒沢芸術家村計画

駒沢に移り住んで以降の榮蔵は駒沢芸術家村計画を持っていたとされ、自身の芸術活動のほか近隣に移り住んだ芸術家たちとも交流がありました。

曹洞宗大本山永平寺の東京別院長谷寺の本尊である十一面観音像の製作者として知られる彫刻家大内青圃（1898—1981）は、駒沢交差点付近に居住していましたが、戦時中の空襲により家を失った際には一家で菅原家で暮らしたこともあったとされます。



菅原榮蔵画 建設中の駒沢大学旧図書館 当館蔵



大内青圃作 花の観音（ブロンズ）
駒澤大学蔵



大内青圃作 花の観音（石膏）
駒澤大学蔵



大内青圃作 寿鳥観音（石膏）
駒澤大学蔵

主要参考文献

- 東京帝室博物館編『稿本日本帝国美術略史』 隆文館図書 1916 年
菅原榮蔵『新橋演舞場』 1925 年
明石信道著『旧帝国ホテルの実証的研究』 東光堂書店 1972 年
村松貞次郎, 山口廣, 山本学治編『近代建築史概説』 彰国社 1978 年
菅原定三『美術建築史菅原榮蔵』 住まいの図書館出版局 1994 年
サッポロライオン企画『ピアホールに乾杯』 双思書房 1994 年
谷川正己「ライト式」乃至は「ライト風」建築について① (Frank Lloyd Wright 研究 7) 日本建築学会東北支部研究報告集 (20) 1972 年
谷川正己「ライト式」乃至は「ライト風」建築について②菅原榮蔵の作品 (Frank Lloyd Wright 研究 10) 日本建築学会中国支部研究報告集 (1) 1973 年
谷川正己「ライト式」の用法について (Frank Lloyd Wright 研究 17) 日本建築学会中国支部研究報告集 (1) 1974 年
谷川正己著; 増田彰久写真 / 『ライトの遺産』 (日本の建築明治大正昭和; 9) 三省堂 1980 年
谷川正己「「ライト式」乃至は「ライト風」建築について～菅原榮蔵の作品～」駒沢移転百周年記念企画展『震災と復興建築～大正時代の駒澤大学～』 2013 年
小黒浩司「図書館としての耕雲館」駒沢移転百周年記念企画展『震災と復興建築～大正時代の駒澤大学～』 2013 年
中山章「禅文化歴史博物館セミナー講演録 駒澤大学耕雲館 (旧図書館) に見る百年前のインフルエンサー」『駒澤大学禅文化歴史博物館紀要』 第 7 号 2024 年

有形文化財（建造物）登録記念企画展
「大正モダン 復興の図書館」
2025 年 5 月 12 日発行

編集・発行 駒澤大学禅文化歴史博物館
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1
電話 03-3418-9610 FAX03-3418-9611
印刷 (株) 二葉企画

